



清文集

前編

三





清々文集卷之三

目録

- 一 田九郎云満子婿の酒徒評
- 二 守氏云孝の奥書
- 三 春棠窓の銘
- 四 雑話十二章
- 五 病中倦夜
- 六 挽詞竿杖をへ
- 七 青錦堂の紀并道行
- 八 幸化小をうたる文

九 流斜之人、く子紙

十 其舟より其素を編む事

十一 其泉の編む先考体計

其泉の編む事

十二 白拍子能後續

十三 大圭碑文の文

十四 間暇なる事

十五 頼光綱子令乳を授け画の價

十六 松八の事一傳り

十七 松雪の事

十八 武陽渭山へ巻ス

十九 阿保院の画の價

二十 其世に子孫の修文

廿一 雑話四章 并、昔巻

廿二 十七回小編の要句

廿三 勸學子歌

廿四 嗅洞亭小抄小辞

廿五 戸田氏三回忌集之序

廿六 妻小おらねる人の許へ了る

廿七 林外老人へ贈る年賀

廿八

後東亭

廿九

野人へはらう

三十

小野天神を納め

第一 佃村九郎去清小僧

酒徳辞

老人あり雲茂幕トバリふし雨月をを結し堤  
 をカシ席しそ花多残おし。心の如く小朝夕をも  
 所そ治世の中乃治をふまのなり。武功の余光を頂  
 き子孫のつさをかゝるは海うらた。年くくけりて  
 ちる乃ハ法より田乃里の暮秋をメて志如と屋作。  
 起ると看と。夜そんてら又看む。醉時ハ川風平吹  
 まさむきは静よ盃残ひふ。さの法きめくくさ家  
 獨乃夕アハきねを脱き足をもよして石船く燈

古記云  
 つさたり  
 稻のり  
 五郎書  
 佃ツクリタ

三十一

三十一

けりよは移く。んあうれんおあへてち茶碗を出す。  
 此のし紙をうるとよあこひ散るかいらを教き。三  
 盃と又六盃をみ流う。流ひもけう。茶をて。神  
 風乃いさねよく。曲くぬんう。茶子れ道も佛の教  
 も。心裏おの流う。佛のやむ。誠平阿う。こさ老  
 乃服ひ

おとこ  
 ぼのこ  
 んをやるふ

心をやるといふ志うぬやと

雪宮うくぬ人のこの茶言老人のうへさう。劉  
 伯倫<sup>ヤロ</sup>持<sup>モチ</sup>を左衣の味方とけして程醒を又看む。  
 一人は白丸くま茶とのふ志く相となた

才二 守武志茶之奥書

六波羅密寺のむとらよと流き茶といふ流茶あり。常に古  
 人乃茶れ癖をそんへせり。埋る古人の茶をある  
 いた事。間干飯と入也。人の老弱病後。ち本の小  
 式紙よむ。茶あへてをわく。室とこをてあは  
 予是茶をめえ茶言一刻とと茶言。時をく  
 今角倉乃文庫ふとく。西本のうく。佛の茶は  
 ちりさけり。武士乃んもわく。一物とちり  
 ちの庵徳く

才三 春棠へ遺す窓の銘

高川北窓下  
倒晴語

高川北窓下。自謂羲皇上人と。清風の来きるや

嘯きくそひく落葉拂くを好む。後人陶窓

と評てうやみうやむ。羨まざるものたり至る。

飛簾孔  
窓ノ名ナリ

屋上子飛簾孔を云む別名也。天地怒る時吹

怒於土囊之  
口風賊

草花葉のゆるかき。地洞不きくぬくこと甘夏の元ん

名れぬた日も吹。流花と好むる夕暮於吹く川を

して日言さ夏乃氣をよさんと好むをいふ事也。

よさんと氣ふよの氣おとん涼しかり。忽ち夏の

日乃氣をよし是哉又して夏日子遊ふを崇之。屋

屋卵窓ハ  
屋根ヲ切キ

卵窓と名付るものを作り日く故人を能く好む

窓ヲ明カク  
新ニ号ク

この世

涼しさの富貴と来さう松乃存

昔尸傳り志気幸す

寺四雜話

一蒼顔す又字を教へる。鶴今飛來る一字もよ

む事ありと別名を邪字として飛去るへ。手録も

先祖を敬ぶるを道くも殊れ文字細工を移りては情

日す中守らる和漢おもるの自中を感し墨之哉稱し

てそ道子日我窓くく若老ハ眉を擧げて能きと存之。然

とも風雅のれをい深うく如人の手記を頼りもけり

ふもつたなきもや。自慢をいひぬく。一てさき。くは  
ま。同以謝。聲。謝。画。を。す。へ。た。い。へ。と。傳。輔。も。その。趣。業  
好。も。も。あ。と。拙。な。り。と。は。し。ま。す。と。と。れ。中。并。う。り。と。い。え。  
傍。人。の。ま。時。危。す。る。事。同。お。の。事。あ。り。學。道。此。の。用。の  
事。と。あ。ふ。事。之。非。也。雪。溪。先。生。と。徳。書。の。名。有。り。人  
なり。一。り。事。う。す。う。り。その。を。見。て。今。て。下。れ。名。字。の。徳。  
也。又。ま。一。新。の。付。張。ん。な。ん。その。う。へ。一。字。と。を。説。く。ん。と。か  
も。又。ま。の。通。理。を。一。り。と。と。る。も。と。さ。る。り。の。可。も。か。じ。  
強。聲。謝。を。見。て。甚。怒。ふ。へ。一。や。大。笑。あ。り。う。り。長。夜  
腹。淋。一。く。厨。飯。あ。り。也。や。ア。僕。云。有。り。何。の。業。有。ん。と

ア。有。と。云。何。と。云。ア。九。年。母。之。つ。あ。り。と。云。世。名。鶴  
一。と。も。お。と。り。と。又。大。笑

一。東。坡。の。信。の。工。ま。も。字。達。り。画。一。も。晴。ふ。あ。ひ。と。と。と。を  
一。光。悦。生。涯。の。心。言。た。と。甲。斐。國。身。延。山。長。廊。下。れ。新。口。の  
額。不。て。お。と。い。志。と。れ。と。通。長。ノ。二。字。あ。り。

一。と。ま。ふ。何。の。道。を。と。う。や。と。ま。達。磨。大。師。不。て。お。り。ま。を  
九。年。面。壁。と。て。号。名。各。僧。和。漢。お。も。習。者。と。し。何。像。哉  
念。一。と。る。愚。東。大。悟。の。祖。九。年。の。月。壁。ふ。む。い。て。尻。を。腐  
ら。一。悟。ア。と。ら。と。不。善。用。を。と。と。ま。九。念。面。壁。於  
死。ん。と。念。一。念。而。悟。此。語。禪。一。二。三。と。念。一。て。二。念。お。り。と。か



と榮華此情なり教乃要主也一棧九念して向ふハ  
 堅ふても窓あつても窓あつても栢樹子つても海も山も此其  
 時の心の的を望さん二種の的を捨て教年暗くさる  
 を放さんう又昔の象の像とて其の象よふふりさる  
 片月痛さお柳葉も思ふ孤舟の一名也川上の観念  
 憚不見性成仏天國の虚名なん澤庵も思ふさ  
 瀆す。至處難信とはる若れ心甚をさく穢りさる  
 ん古賢禪師海下光の中を責るありさる事人  
 一昔義士ありて其の持るる扇とて骨をさり掛おして  
 秘藏をさるとん信らふおつとの手跡とて 同くあも絶つぬ

古賢南紀ノ  
 人之海印光  
 ヲ作

おとひよありさるるさるるさるるこれせま何きおその比乃  
 日く切も力へた事之切方の心を感し傳りたり  
 一英一棟りまゝさるる流るるさるり大笠をさるる坊  
 と此<sup>カクキ</sup>流るるおの流るる禪をさるる云人あり予云きハめて柳  
 一本事流るるとん流るるさるるつらう見え道へのふ  
 清水流るるの西の流るる時ふさ事あり下野玉草  
 神と云ふり今も柳あり古流と云。新柳の時見傳りたり  
 松ふらん年終るるの心ハう、事ありや東北利とる土佐家  
 へ伝きハされり是れ。昔杉戸の流るる櫓扇をかさしる官  
 女と事ありありや答ありたりとて此事よりとる

折竹ふるふ土依家の苔へもたうハささきうり仍て積の  
 事以てしる也 道の人子清水流る柳陰志うりて  
 してまきと身うつき 獨行潭底影。數息樹邊身  
 賈嶋々自愧の句ふ叶へる道の入り奇と彩た今子  
 あら

二つの法ん戸神屋へあはるる女のま仕おはゆりて  
 ことと勢冲動て故へゆり時御縁ともて奥あまてど  
 の方名をとりあふつま。やきまを何ありうれん女と  
 何へ志とくしとてそをたぬ。お湯めらけおひくまて三年  
 とをまきまうつまて。アとらるる心有て。ちの女なりうり

一茶をゆとる人云茶ハ二つ置かせておひきへうやうお  
 御をとおして。も三百番の外なり。二つ置てら六千まぬ  
 了先互先を教つり。うり。方量那。思り。うり。不倫。中。と  
 とをかく。人なり。又。某。不。と。云。云。論。あり。中。下。の。中。  
 一接。ゆ。お。ま。う。て。あ。度。と。記。道。と。称。子。の。と。を。お。了。と  
 る人あり。當時。茶。子。お。あ。て。ハ。仙。ト。也。是。子。對。す。う。と。の  
 宗。通。の。記。傳。言。名。を。是。子。等。し。と。を。さ。ね。う。仙。ト。お  
 ぬ。さ。ま。て。も。不。慌。又。ね。う。り。て。も。後。も。く。と。其。境。の。遠  
 ひ。る。う。り。の。な。り。風。雅。の。上。を。黒。白。と。ち。ま。ら。ふ。か。る  
 こ。の。子。を。あ。り。一。茶。と。一。人。の。上。を。と。持。て。ん。其。格。也

日其時うまふとわうてま下す三ことわうる如し  
風雅の務方まうちたよなるおふあう一其人を  
歴千人を感きしめてもわう神うさ一下も一家者  
流をさう上もやと遠くをせたりひくて月雪花杜宇  
をさけしみつううをを忘るうこのなり上も必衆  
口金をさうしけうす近一を道ぬ能一してはくぬ  
時を牧業う書したるうく回ふ發や容古白をうち  
黒を返ふもを早一しんらうをうらまう路ては風雅  
の才よあうと神急す叶ひ鬼神を感きしと病  
魔を退き雨を祈る名を以圖を通り悪夢を払

ふ是時神急す叶ふ如く一然ら飛千の有無心配  
系子飛す小配まを心静之其態のつらまふあう風雅  
ハ家氣の如うち小空心有意をむすひつら氣と心は  
たうひよく務時を佳句とかり心と氣相和し時と地  
乃句と如りの也心小氣の中けうり時とあう佳句と如  
也然ふすをふあう相を下すと云へ一神急の舎欲  
を心けりへ一是よも上も下もあう  
一昔仙臺の大き上流の時さううの家  
いつ一雨ふつをみ一花のきわ一るす  
ばんびういり桶とぢの花

此一丁一頁を古くあり略す

一 蓮教小引目 桐花 柳花 七文 菊主

四季の蓮つみりと云 侍りたる花主ぬと云 蓮  
教は月見小夜の御城之御能を物々宵の受ふ  
殿侍年也正しく委枕上り立を多し蓮つみり  
一 蓮の裡におひたりと見ておひぬりたり感  
くして一子も忘る日甚蓮教を打たれた甚御  
接姫すくねむい何と云 蓮教を尋ねり侍と御上意  
ふてありし時此蓮教の中お糸と云 おひとは了上  
りく花主と云 此樂屋への上役お糸と云りたり

と能き蓮つみのぬみハハハとこつまぬりたる  
花主ぬを當てふ上侍りたり乞ふより幸  
くお小殿侍年也蓮尊と今と云も不絶已得急  
らと云と云一 名お糸重ぬり云より一月と云 哥  
お心をよきしもの之礼教を必風雅お心たてて  
叶ふまじき事也 蓮の文脈つりすしてを舞  
もろもろおももろやろも形も心つらぬれんれ  
けし蓮教のさる事お糸と云昔一老人の夜話有  
一 寧ろ晝寝子曰朽木不可雕也下器よりと云 夜  
をられたと云さちと云呵了お糸と云お糸といひ

源氏の良きもの。序は所合せさうく日本の  
 道理を通じり家々の事よりくまなむいとま  
 信る源氏のでふをなを能く存返りへん皆口の  
 ぬへ一宰予畫いぬくくとりくの事ふよみく  
 けりも支子の不様始るけりまてあまう色未揃  
 花の夏駕予久うかの事をとせしめてたれいと  
 於あのをまじいとさうく阿うさるしりくや何道  
 もくくとしてよむ心也於の字心をとむへ一さる  
 の事をとめしめて遠き國斗もみ教るものこの  
 事なるは是又ひとの心をくく能するは

論評  
筆解

源氏を金瓶梅のそととハ一系予源氏の道理分  
 明ありさるく「やを美神も表とるんあうさる  
 つものそれとなりれたは源氏を源氏とて之  
 者奇ふて世物語の大切なる事ハ明かく揮て其  
 日本に事々を中く解くもの也又韓退之云宰  
 予畫寢奢侈を憎むの語なりん畫少く畫を混  
 雑く事ん

第五 病中倦夜

けしは切ふ老婦時夜と云病有り打ゆきさるおふ  
 一。家う才もやと倒きて今ある事乃やうよう記

世の中をさうくみ侍りてある。志の六阿をわきまはりて  
一着を地より

後乃世をかきけりとも一くそ

あゝ如旅ふし小東の中山

漏る沈む瀉。障あり絶又聽。東窓未生白。枕上  
一灯青。右雲溪先生病中侍取之吟。時今思ふ  
歩ぬ

良薬甲、病魔を遁れし時

うゝ生く何をまき風上世も存

障絶窓志らく灯空——

才六 挽詞 竿秋へをス

父存在乃時ハ立ニあそび居るハ必ハ徳をつとめ  
之をあせらば我孝とをあり。孝子法ハ海法ハ平ハ  
法キを地ハはくぬき天をあふく。此等ハ孝子事<sup>ツロラ</sup>ハ此  
也。なとしてこのつとめ信者ハ常にして。若とぬりて  
ハ信の端。其端のはしあそびあり。然る平法キを常  
るは信ありて。其信信ふゆきされハ又其其端ちん  
や。そま誠とたあそびるをの<sup>た</sup>面友おともはく誠解り  
信を解るまらに似たり。只ん乃乃ふ所誠常也。一と深  
くそれ人をあつ。はくは家を識つて者必信ありと  
謂ん







昔本功子橋山と云妓あり。方人肝を縮め朱  
唇を竅ふ。とや有り。其重司畫せとも心誠摯  
めり。酒家の一吏。平生涯の少信。志と如し傳く。  
或時支那に佛の法を以て。巫電志あり。此の發も神被も甚  
く。便處の別みちのく。方為あんと。顔子身をさう。終る  
秋風もたや吹そ。へく。乃其の

言おと。室常志あり。川の岸

とよみ。てとや。切拂ひ山林ぬかく入るふ。  
恩乃里人有かく。た。いと。て。か。ふ。振。  
り。れ。ハ

恩ハ下之

まゝ。歸る。そ。一。あ。り。れ。ハ。山。里。子

そ。み。そ。あ。衣。裝。休。め。敷。も

又

系。け。の。む。り。一。裁。今。引。う。る

鬼。乃。と。字。く。海。山。色。の。里

為。始。く。守。の。強。奇。ハ。殊。一。塔。々。独。寂。き。子。叶  
へ。了。奇。の。風。情。ハ。と。ふ。も。か。く。あ。も。真。乃。人。景。景。景。  
ね。と。も。さ。や。う。さ。く。う。人。あ。う。ん。と。感。さ。い。一。好。く  
系。竹。の。昔。と。つ。家。を。と。此。乃。書。と。な。さん。と。子  
あ。う。る。怪。く。あ。や。一。み。ん。ま。ハ。必。の。屋。と。う。山。蜂

きやうそへハ  
形迹アリ  
景迹アリ  
はしひのやうなやい  
まやう  
ほたての花のまがえ  
蜂媒 劉後持  
蜜口傳未好信通  
為花評品越東凡  
香段粘符花英去  
疑是總頭利市紅

樹中の一僧

西林寺惠持禪師  
木室三百歳

庐山志元

文集三

二五

將相に至りて  
仕官而將相而  
歸故郷 右起語  
喜でこれを云ふ  
喜為天下道也  
於是乎書ス  
永叔盃錦堂記

出づ。其是也のよき評品しと東風子嬉々  
せり。二ハその。さきとく不劉後持の輝煌の言  
成下之を致す。陳留縣の樹中の一僧。三百歳後子  
磬を傳へて生滅を證く又云。一塔不言笑ハこ  
ゝ八十年先乃移くさる抽瓦。骨節瑣瑣乃造  
物將相に至りて富貴ふしと経歌子耽り。永  
叔の年歳動も七辭をわたりと。いづく今此  
静山老人の寢とあり。四面風色及ちり  
くくわ

其時庵法く存て於是乎書

廿八 幸化不也ス

坊とあるなり。其坊と云は茂用家と云ふおとこ  
あして。京下ハ河くく妙。この智干たりく  
み他。ゆれくけのよくとなく日教をいせれ。此語三  
昧也。窓乃雨よ千里の旅をんよ。梅樹輝  
は。其よと云はあり。割古キ名をく。八橋を  
朽くく。此家杭を。名。か。か。く。ふ。ひ。あ。ま。れ。を  
ふ。を。道。乃。法。を。い。て。は。傳。る。あ。ん。と。風。雅。の。神。の  
初。なる。く。別。文。其。よ。と。云。か。く。て。も。と。や。乃  
此。あ。な。と。云。一。橋。乃。法。風。を。傳。り。時。に。れ。復

誇

道の法  
机心放ちて  
為家道位と  
身はゆる  
其は

文集三

二六

才九 流斜主人のく手紙

牡丹小獅子一体の影を。前非皆汗。流風を。何れ  
と。附不。辞も。早も。うた。り。あ。り。と。と。朝。屋。要。占。り  
歸。と。お。見。洋。尼。別。出。立。美。佳。後。接。府。と。尸。昔。親。仁  
と。と。と。と。と。又。素。余。り。面。白。乞。又。袖。不。限。一。尸。以。玩  
先生へ。よ。く。く。少。中。と。り。と。し。

廿一日

才十 甚舟より志素を贈る書付の返事  
如作京の男を。さ。う。く。子。よ。う。く。わ。く。編。書。八。目。不  
あ。り。と。村。子。の。む。と。け。と。ま。ま。の。り。と。

書老のあはれ海耳一腐り瓜

礼を。活。也。聖。到。て。了。也。人。以。齒。為。て。之。折。之。を。知  
ら。ず。世。人。熟。瓜。と。信。る。こ。の。意。く。石。瓜。也。以。之。一。  
今日。厚。志。深。う。く。と。飲。甚。や。と。明。く。て。物。以。て。尸  
附。

才十一 伊丹寒泉へ贈る書付の返事

年々々也

半町  
何。れ。と。常。み。惻。と。と。て。武。陽。小。有。一。時。才。町。を。重  
色。使。来。り。ぬ。各。小。座。一。く。披。き。ん。進。た。句。あり  
杜。宇。と。東。より。休。む。を。と。る。なり。

白中僧あり

輓六昔々  
泥足同シ

和章騎馬  
似東風

飲中八仙歌

三瓦兩舍

妓集施  
舎水滸傳

諷

輓士鉄のこしく歌む。泥足り驚ふまハ船子乗らじ。  
 沈碎の一書くと結糸ふ。昔今三月雨舎のな種  
 まつ格のちうらハ朽くて。又あつとすきく毎年回  
 一うくは。口十うふとし。もろきれたんふねとひ出  
 う家ちまを夜うりとずーらきく我。彼柳をう  
 そむひら家おの整りもやうー。体斗ともまけういさ  
 けりーいのの。あう垣根もとーよまふうりと。卯の花  
 のちるれたるす。ほくき彼の一句平ハ真ありうり。  
 漆は破てちむをを抱き。甲冑を下ならぬ。張の

あう垣根  
 後於に懐紙  
 子名をま  
 名ヲ讀ハシ  
 ころ也

さぢめい  
 ぶん

達人。今誰をぬらう屋んや。時己ふまう泉流きん  
 よ孝の道を畫して又。新ふ先人好う平志さう  
 一節。月日の首をりよよとて。あうを吞。声を放  
 て。さぢめあうさうひとそ。字ゆけま表文のちーまき  
 泉

昔流らん画を回一むめのちう形

微ふれはめきこる。一句あハ種ふ品らうう如下如。そ  
 も白ひて子種まう花をかさちうりう。いあーへ今の  
 おううりもそちうーらせてハ世の上。人の真体もこの  
 れなう。あうぬぬの價我さふん知り如如こ控

あうぬぬ  
 ちうやんぬ  
 字祇自畫讀  
 ちう





と古人をよみたり。至福くそ家源く稲香しく  
神あり人わして年程長く。あかく栄えん遊ひ成  
る。や百北余をせんく也

才五 彩光細小むらひ金れをけり守絵の瀆

細立て纏りうハさのぬぬうな

此法積千餘  
ヨリ流りて  
今皆別物月  
二あり

とハ。青子まふの匂之は絵をハす。二条大文ハあ

あさる瀆

鴻毛入るなると第ふ山うう

彩光あひ咲

才十六 橙八白きし傳る

道人采元章は筆架茂贈る。孝白三多筆生花  
自是才思日進と銘え。孝是茂好く筆の及明  
あふはく如支。画以名あり。才時庵筆筒成はる。一細  
一紙こまの取法奇なる如く好いとあり。程とれ林  
の傍珠を焼金火紙照し。一んふ路うまぬ林成  
はるけハ秋も文り。恙是を爰又ハ采人富のた  
て世たりそ好く。老の春風うひ急り。家事毛  
取る。一。傳は橙八白奇矣好恙若人  
死く多ふ。麻もあふん心同の中  
みはるきの銘を。彩乃そちこめて。あふたをひくハ

と字取あして。能因はよみう。同平きと  
むく朝夕此字をよそ有る。

以教師之信破笠老人おアあれ

才十七 樽雪へ返事

法吟く土の言葱溜りて人ねき肥る信細き紐の

山樊是弟  
梅是兄

黄魯直

へくくれ

本城の脱く逃くも 祿ぬかむ  
あく不用むとアわくある城の字れと独笑深海

ア形トトシ

才十八 武陽渭北に遣ス

東より幸ありと六時く信成へし。此度万句既り  
る故あくみちさうくと雪か。東福寺塔取乃門小  
芳く一字あり。是をおまひすと無くと如く  
聖一と力く屋乃若楓

長く通天橋と能法信をたかまへし。穴賢と

才十九 阿みの陰翳

小山僧都の雪平のちりて。そやれはくありとて  
光君乃あささうとゆふうちみも只小娘の事を  
あまれとすくぬも 謙り始あく如世と



物ハの志ハぬらぬらハ州ハ

亦北 芭蕉多味之論文

存心雪兄の句と粉骨又章之中。一も生涯莊園可  
上ふあふん。毎畫て不盡之。大道意はとも哉朱英。其文  
甚句尤真確。世道の重宝。其時危殆人と加ていへ  
らる共平の吹らん也。幸る事端也

之文也其目下句平てそ有る

亦正 雜話

桃行口  
花里  
後庭花ハ  
尻ノ事也

一江南の桃行口。近年後庭花盛に傳をさし俗  
を破る事目不痛く心は好むに相なる。中富ら命と云

男之氣燭暫時を金千疋の價を以春霄を壓たり。世  
人書就る價として其世老を傳る事海す。大明律  
云以陰莖放入人々糞門者杖一百

此刑ノ放ノ字行要なりとを放とは可記也  
云事可理業をすれ杖一百との義志んれ  
お射なん杖不及気悟むへ一放の字を下  
其事暫時千疋を貞園不投者必杖一千。道  
名を遊道といふはさむへあり

一平先年ある名う崎と云。死おとんでいふ事あるを  
道の御悲也。死で後必一家の老と事と事

燕、  
晒、  
各毒、各

おしきをねやうりだのみまるといふ事の口だみと  
と四へんがもれにまをぬ也。不のぬなりといひ咲て別死  
いふ事事りく小酒行去御方へお話笑談の折や  
ア上り進ん極て一家子に説あるんその上理の理れなる  
ん。とやう御志を流らまう家ん。口古かけて一家和て  
むつやうううう。その後又笑談ア作りりて早ぬな  
らもえりあけもせまーやあうう。不のぬまうある  
時を能切字へ人お死其言也善之。東坡の燕、張建  
對が晒、是はハ方うー

一言所西谷ふ入て然坂長範甚社の宝を奪ふの扱。扱

多の盜賊をわーつまうと。長範いうおとひらん橋下  
岩上ふ体して。御山の雲世ぬの光を感しうん。寺子入て  
黄金を指さうまうて四面を拜又甚此は甚名 誓ひ云永  
賊徒此御山ふ入ぬ。没後々御供養なく志ぬやう子頼  
と換櫃を借つて向盡二枚うまうて。生ぬ死後のねとひ出  
唯今つらうとせまうーらせてか

たうのふまのぬをばううとこのんを御ま後れ  
強盜長範とまううと。まうも悟らういまーちも和歌  
うてそ海む園かうう

吾言

一 元文三年三月二十日と也。予八延宝三年廿七  
 夕一日を多き月を遊ふそ。又の身のうへへなつた  
 さらふ。さねと明し世の人。此衣もつり。弁の花。初音  
 さつき。橋おひひ。うまん。桐り。ろき。涙ちう。うり。ゆ  
 をな。と。つりて。再ひ。ゆり。あ。平。望の。語。あ。く。く  
 夏の。字。を。あ。い。と。若の。句。と。秋。あ。い。な。ま。ま。事。老  
 了。と。せ。下。之。お。う。清。水。ち。平。福。安。一。て。内。路。不。麻。を。設。て  
 二。之。友。喚。柔。遊。後。作。の。お。う。其。句。の。花。を。又。と。い。ひ。出  
 脚。印。を。結。ふ。ま。や。く。小。橋。ゆ。く。決。し。く。く。涙。は。世。の。つ。松  
 洞。家。あ。く。殺。き。く。く。く。を。愁。へ。た。守。也。と。氣。を。踏。め。ん

を。屈。一。て。来。る。平。從。来。め。く。く。持。節。も。折。ち。な。れ。と  
 も。又。ん。の。ま。ま。く。ぬ。ん。ね。と。う。の。種。あ。り。う。り。を。替。く。お  
 持。新。吹。海。ふ。心。の。歌。を。流。へ。又。ふ。と。く。れ。道。も。あ。り。う。り。と  
 散。蕩。の。日。を。ま。ね。敷。う。ち。も。あ。く。ま。を。死。お。ま。ま。合  
 畫。て。別。捨。腐。平。ゆ。舟。中。更。は。つ。と。ま。守。心。を。さ。し  
 と。云。ふ。平。て。ら。く。く。ま。一。夜。中。の。語。を。ね。と。ま  
 正。く。夏。の。と。く。都。良。音。を。ね。り。上。暫。汗。ま。く。ん。暑  
 一。遊。吹。下。ス。四。月。の。風。も。白。ひ。か。れ。中。小。ま。一。夜。く。く  
 中。唱。へ。咲。て。地。序。平。へ。て。漸。ん。静。ま。く。く。從。是。春。也。價  
 修。ら。自。負。う。り。いと。心。ね。り。お。り。く。も。涙。と。な。り

吾一宿寐よいのうまれん神必吾痛ハのり  
る古今其例多し。市時發句不惱む人。自他端  
あり。お推る命已跡つへき縁ならんを果ともみねふ

遠う〜ぬ家むじ〜とに念〜きよ

老をいひのり涙流るんとてりトキ

才三十七回忌より贈るる句

秀鏡の如し先考十七回忌遠忌を物方て吟吟  
の之れ誦子月夜をねるゆ酒涼し一ををねる  
是意の日やとてけも伴縁の右た

才三勸學子歌

一胡雪路果然として下るハ松海危古く  
なりう。ゆり干をあら〜と。弁を幸て針の  
仰の山能修此林をんすてけあり

瞋ハムケレて云道よ返て書を賞へ。世に富むともら良回を  
賞て用る事あらう純。句中おあり千纏あるん  
ハまことの返へ志うハあれと

ふ〜書考あら〜就苑此橋何ら

昔享保十一一年春三月仲院

御照又

弟苗 喚洞亭小遊ふと〜



ひらき。西より建つまきき家梅くみめうーた住居こと  
わくく上久カミサヒくれ。うーなうーぬ雪が囁きうーうーうー  
お井乃夕言はうてそくふハヒ

上畧  
家之存  
古の囁  
徹事記

家之存古布して朝乃時雨うぬ  
庭紫葉樹乃紅世界なりうう

才廿五 紀別戸田何某三回之一集

發疑メ指示  
切八人  
蕭相國  
世家

又本古衣乃暮秋花咲交けりも世の嵐人の面月の  
雪うさうひふうけてほるの影をう。有日月の三秋もほ  
うら。おとよ平な疑して指示項人ありとは世平と人の  
世ありううん

ツミヒラカ  
一二

一二あり秋の存草乃花

面上三年土  
まの州又生  
老杜

面上三年土。秋風又白ひをうくむ家山。里芳と人  
ちうん

才廿六 書不たくまうる人のまうんアキ

いあ一秋のほめ我筆第巻乃るうみうんうん  
く又恒ありた。いそくといひそてあつうふとみ  
の事えりまふ。九月十三日とふ平そ身はうとる。  
お道る路の志うく短さとのうへはうくア乃  
うそ何くれとあうてうふ。子種中やもあうやうく  
まのみたるむのまうふ。なうかう限してゆきとじ

せ。いよい包て。流景のそりをもくさるく如一言  
 二言。佛の心も海もふそりけり。一もあつたを  
 を折。鳥我撓めく人笑ひ草もいりや。花の思を  
 ありくひ立ッ日も日敷きまらう。たさくまむつまひ由  
 ち。月影をぬくて。流りし。阿婆ハ志あて。愁る。肉の  
 程ゆも。まへく。すべさ。袖の人あみたる。縁と。かへりふ  
 おとひ乃。掌者みつう。むまひく。目をとぢ。縁とく  
 耳小傷を伝て。よ。通る。事あり。せ。ぬる。きく。蟬乃  
 羽の。う。ちく。落き。濃た。れ。とおとひ。散りて。せ。あ。

旅中  
 春陽  
 不意

子と。いよ。その。ち。さ。花。力。ふ。と。押。流。に。宿。と。境。界。不  
 流。ち。く。稀。く。あ。く。さ。や。う。や。う。せ。く。中。子。落。家  
 と。別。う。か。さ。る。家。壺。子。乃。ま。と。子。を。流。して。あ。く。な。る  
 う。ん。ハ。夢。を。ふ。う。か。し。ん。阿。婆。乃。花。の。泪。を。志。く。み。て。  
 袖。を。乃。曉。ハ。清。く。し。り。さ。る。こ。も。又。来。る。夏。を。あ。の。光  
 み。ん。を。あ。し。人。ハ。う。つ。た。誰。れ。此。境。ふ。あ。さ。る。人。あ。る  
 は。い。流。被。け。み。ま。た。い。ん。と。夜。そ。ん。ち。う。き。み。ハ。人。の。う  
 き。を。引。流。や。折。柳。可。き。家。の。書。ハ。か。く。空。を。あ  
 と。香。猫。庵。を。志。く。せ。る。ふ。せ。ん。こ。ま。げ。く。て。路。を。た  
 傳。る。耳。出。神。を。こ。れ。命。ふ。ら。う。ん。と。ち。み。と。て。流。流

魂消





諱ノ御靈ハ

伊弉諾之命

事聖王云云

道返大神ハ

泉門小塞マ

寸大神也

檜原也

く。議のみみはのさ<sup>前</sup>を<sup>點</sup>追ふ事。ゆゑに<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>れ

る風の塵汚を<sup>レ</sup>洗<sup>レ</sup>ひて。いふもす<sup>信</sup>く<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>に。南<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>指

さる<sup>レ</sup>處<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>東<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>宮<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>。後<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>夷

州<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>橋<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>。江<sup>レ</sup>歌<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>ほ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>宮<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>り。後<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>撒<sup>レ</sup>

て。二<sup>レ</sup>夜<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>声<sup>レ</sup>眉<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>。多<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>て。共<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>互<sup>レ</sup>不

必<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>弦<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て。子<sup>レ</sup>侍<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>弟<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>。け<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>風<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>千<sup>レ</sup>景<sup>レ</sup>。暫<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>破

ら<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>。道<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>。さ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>。心<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>。於是<sup>レ</sup>禹<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>。唯<sup>レ</sup>確

也<sup>レ</sup>。嶺<sup>レ</sup>崖<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>。小<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>橋<sup>レ</sup>遠<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>。只<sup>レ</sup>信

海<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>愛<sup>レ</sup>。朝<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>ん

あり<sup>レ</sup>。其<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>昔<sup>レ</sup>。然<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>。海<sup>レ</sup>。昔<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>。唯<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>風

去<sup>レ</sup>虚<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>名

を<sup>レ</sup>嘗<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>虚<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>との<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>感<sup>レ</sup>。然<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>。昔<sup>レ</sup>時

危<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>暫<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>。危<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>。操<sup>レ</sup>觚<sup>レ</sup>臺<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>掘<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>不

四<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>強<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>。嘴<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>重<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>臥<sup>レ</sup>ス

其<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>護<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>。家<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>幸<sup>レ</sup>幸<sup>レ</sup>常<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>ん

唯<sup>レ</sup>危<sup>レ</sup>久<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>表<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>揚<sup>レ</sup>江<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

字<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>保<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>希<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>流

乃<sup>レ</sup>九<sup>レ</sup>門<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>。姓<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>り

夕<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>耶

名<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>融<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>民<sup>レ</sup>皆<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>今

雨縮と云ハ  
幽林五ノ記  
下リ

を更るよ乃く民皆去き我乃く。雷走り雨如  
るく人を撓む。雨なく雨縮。去そあちる雨  
乃雪。山く我築く。人皆心我洗ひ清味をぬぬ  
僧の神かさ藤子うり。藤士ハゆり。雨なく雨縮。去  
あくあけ藤濱も海をうり。市小別く漢高  
も茄子も百合も竹も。川床の皓齒かののふ第へ  
水様の柳髪遠みゆき。家僕尻を高く低  
く休めゆき。刺標干の滯さ能波をぬききそ  
く能を休る。室ハ僧の扇も白へんぬり。うら  
空しく反照華風のゆき貴をぬき。一句を修りて。

吉城皓齒  
在樓船と云  
下く休遊  
玉をゆき  
茶花物語

さうち子雨あつ。晴く曇く怒の字そく。此字  
切あま。されく扇。言杜宇の句。鳴の字。我目あふ  
矢ひ別水く。ぬりた志け山の言。了をうき。二葉子。うき  
よのけ及の中。只文字。自暴自弃の人を撓む。仍て此  
句をぬき。とあれ。建家。句。み。う。下。子。ぬ。へ

才三十小野天神を納く。跋 紀府

一軸く。乳。綿。城。下。く。人。同。次。命。云。傍。詠。名。皓。盤  
逢。久。信。心。ち。あ。る。く。上。新。可。家。作。く。方。休。其。と。好  
就。中。黄。靈。く。御。神。德。常。小。感。く。を。ぬ。ひ。ぬ。因。以  
淡。く。紀。府。子。信。宿。く。安。三。之。兩。君。く。句。を。乞。奉

了て合きて三吟と奇伝とある。是を放てハ六儀の風頭  
言月花鳥別神惠小叶也。神慮別六合有彌  
らん是哉甚く退て細めたり。一層と松の標  
たり事をアハしくめぬ

右全篇門人艸々庵雪川模寫之

淡々文集卷三終

風音似寄舟遊より  
四時の飛鐘をきく  
を味文素を教甲  
其時乞て彫る雲林  
子ハ人割高白くを原

くぬきしんり川かま  
雨土結花の舟あそび  
法書きみの口一りの  
高をむきおこし  
舟のむしうきみ雨

一  
かき  
法

五  
珠  
鼓

鳥  
林

友

文集

〇二

文貨堂詠諧書目

半時庵淡々文集 前編三冊 出来

同 後編 嗣出

同 藪句集 全

行脚集東東龜 富天選 出来

押花宴 全 出来

續蛙海 半時菴高判拔書 近刻

寛保二年歳次壬戌十一月望

浪速書肆 梁瀬傳兵衛藏版

心齋橋筋北久太郎町南江入

